

*The Cloud of Unknowing*に見られるワードペア

青木 繁博

Word Pairs in *The Cloud of Unknowing*

Shigehiro Aoki

1. はじめに

Gustafsson は、現代英語における binomials と呼ばれる表現について考察を行っている。binomials とは、“*men and women coming and going this or that way*”(p.9)の中に見られるような表現である。新聞や雑誌などを含む様々な現代英語のテキストに見られる binomials について、その数や頻度、機能などに関して広く考察されており、そのことから、このような表現は現代英語でも非常に多く用いられる、いわば英語に根ざした表現であると言える。

本論文ではこのような2語からなる表現をワードペアと呼ぶ。ワードペアは、上述のように現代英語においても頻出するものであるが、特に中世英語で頻繁に用いられる表現であるとされている。本論文では中世英語の作品を扱い、ワードペアに関する諸相を考察し、同時にその考察に基づいたワードペアのリストを作成する。

2. ワードペアの考察範囲について

ワードペアは、中世英語あるいは現代英語を対象に、これまでも広く研究されており、また様々な用語で呼ばれてきたものである。用語のいくつかを挙げると“repetitive word pairs”(Kikuchi および Koskeniemi 1968, 1975)、“die tautologischen Wortpaare”(Leisi)、“synonymic pairs”(Shibata)、“synonymous pair-words”(Yamaguchi)、“binomials”(Gustafsson および Koskeniemi 1983)、“irreversible binomials”(Malkiel)、「ワードペア」(谷)、「ペアワード」(青木)などがある。

中世英語を対象とした研究については Koskeniemi によるものがよく知られている。例えば Koskeniemi (1975)では、*kyd ne knowyn*、*mede & reward*、*deed & slayn*、*snytyn & bityn*、*of body er of catel*、*bodily & gostly*などが例として挙げられている(p.213およびp.214より)。

また現代英語を対象とした研究では Malkiel がある。そこでは *odds and ends*、*husband and wife*、*knife and fork*、*hammer and tongx*、*back and forth*などが例として挙げられている(p.113およびp.115より)。

このように諸例を並べてみると、中世英語の例においても現代英語の例においても共通する、ワー

ドペアたる「条件」や「定義」と呼べるような点が見えてくるのではないだろうか。それはすなわち、何らかの接続詞によって、同意語、反意語などの意味関係を持つ2語が組み合わせられていることである。これは形の観点から、そして意味の観点からワードペアの特徴を記述したものである。しかしながらこのような記述も明確な基準というわけではなく、形と意味のそれぞれについて、どのような範囲でワードペアを捉えるかといった問題がある。実際、研究の対象となる範囲の取り方によっては議論が生じることもあり、作品の分析にあたってはまず明らかにすべき点であると考えられる。よってここでは、ワードペアとしての対象をどう取るかに関わるこれまでの見解を踏まえた上で、本論文において扱う範囲を定めることとする。

まず接続詞に関して言えば、and (both... and... を含む) or (either... or... を含む) 否定辞と共に用いられる ne や nor、また as well as、not... but... など様々な表現が、つなぎの言葉として想定される。これらについて、どこまでをワードペア表現として認めるかについては、ワードペア考察における大きな問題の1つである。先行研究では and、or あたりまでが扱われることが多いようではあるが、本論文では、用例の数もまとまっており、かつ基本的な構成であると考えられる点から、ワードペアのリストに載せるものとしては「andによるもののみ」としたい。

次に、2語の間にある意味の関係に関しては、狭い意味では同意語からなるペアのみをワードペアとする見方もあるが、Koskeniemi (1975) の研究などから、同意語からなる組み合わせだけではなく、様々な意味関係を持つ語からなる組み合わせがペアとして用いられていることが明らかになっている。したがって本論文でも、同意語に限らず様々な意味関係を持つペアを広く扱うこととする。

3. 本論文で適用するワードペアとしての基準

本論文では *The Cloud of Unknowing*¹ におけるワードペアおよび関連する表現を考察し、ワードペアをリストにして提示する。しかしながら、ワードペアを抽出することは決して機械的に進められるものではない。ワードペアの定義に関わる上述の留意点、すなわち形や意味に関する事柄に加えて、文脈や状況、テキストまたは作者に関する事項など、実に様々なものを考慮する必要がある。ある表現をワードペアとして認める際には、できるだけ明確な基準を用いることが望ましいと考える。さらにリストに載せるペアを選ぶにあたっては、その基準がある程度統一されている必要がある。ここでは、ワードペアたる様々な条件を改めて考察し、ワードペアを抽出する際に何をもってワードペアとするか(あるいは「しない」か) その基準をできるだけ明らかにしようと思う。なおこれらは、あくまで本論文においてリストをまとめる際に適用する基準である。

1) 同一の語からなるものは除外する

これは大前提として(2語が同意語の場合はワードペアであるが)「同一の語」からなる表現については、ここで言うワードペアとしては考えない。以下のような表現については、もし考察するにしても別のアプローチによる考察が必要であると考えられる。

1 テキストについては Gallacher による電子テキスト版を主に用い、必要に応じて Hodgson 版を参照した。ワードペア等の用例を引用する際には Gallacher 版に基づき、(頁、行ではなく)通しの「行番号」を表記として使用している。

36 than and than
 344 falleth depper and depper in synne, and ferther and ferther fro God
 346 riseth hier and hier fro synne, and nerer and nerer unto God
 478 ever more and more
 1289 ever more and more
 2334 ever les and les

2) 単語ではなく語句が組み合わされたものは除外する

単語1語と2語以上の語句との組み合わせ、あるいは2語以上の語句同士による組み合わせについては、本論文ではワードペアとしての考察からは外すこととする。例えば以下のようなものがある。

284-285 clensid and maad vertewos

これらの語句の間にある意味の関係を見ると、clensid は、同じ品詞である動詞 maad ではなく、それを含む語句 (maad vertewos) との組み合わせでない限り、間にある同意語的な意味関係を見出すことはできないと考えられる。したがって、ここで適用するワードペアの基準からは外れた組み合わせ (1語と2語との組み合わせ) ということになる。

同様に以下のような「2語以上の語句」and「2語以上の語句」といった組み合わせの表現についても、今回の考察からは外れることになる。

1863 beryng of body and mirthe in maner

これはおそらく、“b”(ber yng, body) と “m”(mirthe, maner) の音を合わせて、対になるように用いられたものであろう。興味深い表現ではあるが、語句同士の組み合わせであると考えられるため、ここでは扱わない。

3) 3項目以上が列挙されたものは除外する

2167-2168
 thees thre principal: minde, reson, and wille; and secondary, *ymaginacion* and *sensualite*

例えば上のような箇所については、一つ一つの項目がどのように関係するかについての分析を試みる。この例では、前半の “minde, reson, and wille” については3項目が列挙される形となっている。それに対して後半 “and secondary” とある箇所に続く2項目は対になるものである。この場合、前半にある3語はワードペアとはしない。後半の2語はペアとしてリストに含める (2168 *ymaginacion* and *sensualite*)。実際には、前半部で用いられた語句も、別の箇所を見ればワードペアの要素となりうる語 (ワードペアとして頻出する語句) ではあるが、ここでは3項目以上からなる組み合わせであることが明らかであるため、ワードペアとしては扱わない。

3項目以上が列挙された用例の中には、(前項で扱った) 単語ではなく語句からなる表現と組み合わ

されたものも多数見られる。以下のような記述もその一例である。

1865-1870

Bot I sey if that thees unsemely and unordeinde contenaunces ben governers of that man that doth hem, insomochel that he may not leve hem whan he wile: than I sey that thei ben tokenes of pride and coryousté of witte, and of unordeynde schewyng and covetise of knowyng. And specyaly thei ben verrei tokenes of unstabelnes of herte and unrestfulnes of mynde, and namely of the lackyng of the werk of this book.

ここには “tokenes of pride and coryousté of witte” (1867-1868) “of unordeynde schewyng and covetise of knowyng” (1868) といった表現がいくつか見られるが (下線は筆者)、いずれも tokenes にかかるもので、結果として3項目以上が列挙されている (良くない表情は、prideやcoryousté of witteなど様々なものが表に出た「しるし」である、と読み解くことができる)。

これらの表現については、2項目からなる組み合わせのワードペアの性質や機能を考察した上で、改めて取り組むべき課題であると考えている。

4) 接続する語以外に、間に語句が入っているものは除外する

接続詞以外の語が間に入っている表現の例には以下のようなものがある (なお、これらはあくまで一例である)。

動詞の目的語 470-471 maad thee and bought thee
 1286 wylnest it and desirest it

代名詞の所有格 778 oure consience and oure counsel
 802 his counsel and his concience
 1031-1032 theire wordes and theire thoughtes
 1300-1301 thi wyl and thi desyre

前置詞 with 145-146 with body and with soule
 by 255 bi grace and bi counsel
 in 375 in heven and in erthe
 of 558-559 of mercy and of charité
 upon 1374 upon hast and upon nede
 without 1503-1504 withoutyn cesyng and withoutyn discrecion
 to 1786 to penaunce and to preier

その他の語 “iche” 64 iche thought and iche stering
 “how” 243-244 how lystly and how graciously
 “soche” 412 soche a derknes and soche a cloude

“ ful ”	476-477	ful gracious and ful merciful
“ alle ”	869-870	alle actyves and alle contemplatyves
“ so ”	1009	so sweetly and so lovely
“ what ”	1408-1409	what pité and what mercy
“ sum ”	1597	sum fals and sum veyne
“ moche ”	1781-1782	moché error and moche disseite
“ verrey ”	2071	verrey God and verrey Man

このような表現を除外することについては反論も予想される。上の例の中には、対応するであろう2語に同意語、反意語などの関係性が明確に見られるものが含まれている。別の箇所ではそれらの2語が（間に入るのは接続詞のみで）ワードペアとして使用される例もある。これらの表現を含めた広い範囲でワードペアを扱うことで、語の意味範疇が明らかになるなど得られるものも大きいのではないか。実際、多くの先行研究ではおそらくそのような観点から広い範囲でワードペアを扱っており、また筆者自身もこれらの表現を含めたワードペア考察を行うこともある。しかし現時点では、例えば「間に入る語は何語までなら許容されるのか、また品詞や意味等に関わる制限はあるのか」あるいは「対応する箇所の頭や末尾を揃えるといった、他の修辞法によるものではないのか」などの問いに、明確に答えることができない。というのも、中には複数の語が合わさって間に入っている例も見られるからである。

8 I charge thee and I beseche thee
 193-194 of goostly wordes and of goostly worching
 230 in the same ordre and in the same cours
 1282 for to have it and for to fele it

このうち明らかなものはワードペア以外の修辞法（「対句」など）によるものと処理できるかもしれない。しかしながら、それでも幾分かの曖昧さが残る以上、間に語句が入る表現と、基本的な2語からなる表現とを無条件で同等のものとして扱うことはできない。もしそうした場合には、ワードペアの取捨選択、集計、考察の各段階において問題が生じる可能性があるのではないだろうか。

以上のような観点から、本論文においては、接続詞以外の語句が間に入っている表現についてはワードペアのリストからは除外する。繰り返しになるが、この基準は本論文にのみ適用されるもので、今後も2語からなるワードペアのみを考察すべきと主張するものではない。むしろ、将来ワードペアを総合的に考察する場合には、いかなる形・語数であっても分析を加えるべきであると考えている。

5) 名詞については、冠詞のあるなしは問わない

前項に述べたような接続詞以外の語が間に入るものであっても、例外として、冠詞が付与された名詞からなる用例についてはペアとして扱うこととする。名詞に付くのが定冠詞か不定冠詞か、あるいは無冠詞かについてはここでは問題とせず、リストにおいても1項目にまとめる。

冠詞が間に入るものについてはなぜ除外しないのか補足する。ここでは4つの観点から、冠詞のあるなしに関わらずペアを同定する理由を述べる。

まず1点目は、冠詞の有無は文脈等に依存しやすいこと。冠詞のあるなしは他の語によっても左右されており、例えば“alle”がある場合に定冠詞を伴うペアの用例が見られるなど、ワードペアであるかどうかという基準とは別の要因も関係していると思われる。

2点目は、仮に冠詞が間に入るペアをすべて除いた場合、ワードペアの頻度を見る上で著しく異なる結果になることが予想されること。集計したペアの数で言えば、不定冠詞が間に入るものは4例だが、定冠詞が間に入るものは47例と非常に多い。また、ペアの組み合わせによっては冠詞を伴った上で頻繁に用いられているものもある²。このような場合、冠詞のあるなしだけでそれらを取り除いてしまうと、当該のペアの実際の頻度と大きくかけ離れた結果となるおそれがある。

3点目は、単数形と複数形の違いをどうするかという問題が伴うこと。ペアによっては単数形で用いられるものも複数形で用いられるものもあるが、仮に同じ名詞からなるペアが両方の形で用いられた場合に、単数形のペアは間に不定冠詞が入るためにワードペアから除外され、複数形のペアはワードペアであるとするならば、その判断は不均衡であると言わざるをえない。

4点目は、音韻との関連といった問題があること。冠詞のあるなしは「韻律」「リズム」などの変化を伴うものでもある。当該のテキストは散文ではあるが、それでも音が1つの要因としてワードペアの形を決めるものであった可能性はある。ワードペアにおける音韻の役割については、ワードペアの機能や定義などを考察する上で、特に詩（韻文）を研究対象とする場合にはさらに大きな注意を払う必要があることは言うまでもない。本論文は音韻とワードペアの関係について論じるものではないが、将来これを解明する上でも、現時点では冠詞のある・なし双方の用例を収集することが大切ではないかと考えられる。

極力明確な基準を用いてワードペアを分類することによって、1つの資料として今後の考察に資することが本論文の目指すところである。上述の観点からも、ここでは冠詞の入った組み合わせも併せてワードペアとし、リストに集計することとする。

4. 語句の意味や文脈等に関する考察

ここではワードペアとすべきかどうか特に判断が難しい用例について、それぞれの意味や文脈に関して行った分析を記することとする。

1) 意図をもって結び付けられた語句³

165-166 to the comoun doctrine and counsel of Holi Chirche

これらは単に and の左右だけを見ると doctrine と counsel の関係のようにも見えるが、実際には教義にも関わる点であり、少なくとも単純なワードペア表現とすることはできないように思われる。教

2 冠詞を含むペアの数としては、“the *lengthe* and the *breed*” 5例（冠詞のないものは1例）、“the *height* and the *depnes*” 4例（冠詞のないものは1例）、“the *body* and the *soule*” 2例（冠詞のないものは2例）、“the *statute* and the *ordinaunce*” 2例（冠詞のないものは1例）などがある。

3 このような表現については、2007年に日本中世英語英文学会 第23回全国大会にて行った研究発表（「定型句」としてのワードペア、「表現技法」としてのワードペア）においても言及した。

会の教えこそが唯一のものであることを言うために、こういった語句が「意図的に結び付けられた」とも考えられ、またその意図を考察することは本論文で目指すものとは別の問題であると思われることから、今回のリストに載せるペアとしてはカウントしていない。

もちろん今回ワードペアとしてリストに載せたものの中にも、まだこういった「意図的な」組み合わせが含まれているかもしれない。現時点では、意図的かどうか明確でないものについてはペアとして分類し、今後それらの動機をさらに検証していくことが必要だと考えている。

2) 冠詞が含まれるものであるが、対応している語が形容詞等の場合

前のセクションで、名詞については冠詞のあるなしを問わないこととしたが、形容詞などの品詞についてはここで論じる観点からワードペアのリストには含めない。いくつか例を挙げて説明する。

1630-1631 a softe and a demure contenance

notes によると “1630 demure, quiet, composed” とあり、意味からすると softe と demure が同意語として対応していると考えられる。2語の間にあるのは接続詞を除くと冠詞のみである。しかしながら、この冠詞があることによって、これらの語の関係については、あくまで名詞 contenance を介した間接的なもののように見える。そして特に softe については、例えば副詞ではあるが “softely and sweetly” (1989) といった用例や、接続詞が or ではあるが “soft or scharpe” (2352) といった用例のように、シンプルな構成の用例もあるため、それらと比較して 1630-1631 の例は2語の間にある関係がやや緊密さに欠けているように思われる。

また、テキストの内容にも関連する事柄になるが、以下のような例もある。

547-548 a hier and a lower

548 a lower and a higher

958 a good and a beter

例えば 547-548 および 548 の例は、その前にある名詞、“degrees” の2つの様態を区別して説明したものである。これらの表現が用いられている箇所は “Active liif” には高・低の2段階があること、また “contemplative liif” にも高・低の2段階があることなどを述べた部分である。それぞれを a hier (degree) と a lower (degree) と対比させることによって表現したもので、それらの段階を正しく区別し、分けて語ろうとしているようなところからは、単に higher と lower の2語だけの関係ではなく、より広い文脈を考慮すべきものではないかと考えられる。

この項で挙げたものは、それぞれの名詞 (contenance や degrees など) の片方 (または両方) が省略されたものと見ることもできるだろう。このような形で冠詞が残っているということは、当然名詞の存在を前提としたものであり、その場合、これらの組み合わせは形容詞同士ではなくむしろ「冠詞 + 形容詞 + 名詞」同士の組み合わせ、すなわち語句からなる表現に近いと言えるのではないだろうか。実際には形態上の違いがあるため再考の余地はあるが、ここでは複数の語句からなる表現をワードペアとして取り扱わないのと同様に、上記の例をワードペアとすることはできない。

3) 対応する語と語の間にある結び付きについて

460 a light and a party of contemplacion

light は notes では “ 460 light, illumination ” とある。対して party は、Hodgson 版の notes (26/7) によると、“ a party: i.e. the lower part of contemplative life ” とある（下線は筆者）。これらを考慮すると、party は light (illumination) と同列になる語ではなく、同列となるべき語句の一部である可能性が高い。この例は2つの語 (light, party) の組み合わせというより、1語 (a light) と2語以上の語句 (a party of contemplacion) からなる表現であると、2つの版それぞれの編者による考察を比較することによって推測される。

上に述べたように、2語の間にある関係は時にいくつかの視点から分析する必要がある⁴。中には以下の例のように、統語論的な理由もあってワードペアとしてはカウントしなかったものもある。

523 put him doun and away so fer

2233 bodely knowyng and felyng of alle bodely creatures

これらの例では、and の左右だけを見ると、それぞれ doun と away、knowyng と felyng がペアとして捉えることもできるのかもしれない。また例えば 2233 の例については、*knowyng and felyng* といった表現は別の箇所ではワードペアの用例が見られる。しかしながら 2233 で knowyng と of 以下のフレーズとの関係を図式化してみると、[bodely “ knowyng ” of alle bodely creatures] というように、前後から同一の語によって修飾されているとはおよそ考えられない。同様に 523 の例においても、away so far と同じように “ down ” so far と言っているかどうかは疑問である。したがって、これらの例については、and の左右の単語だけではなく、それらの語を含む語句が組み合わされているものとするべきであろう。

このように文脈などを考慮して用例を見る際には、判断が非常に難しいものが含まれている場合もある。中には、文脈・状況といった様々な条件から、2語の間に関係がある（または、その関係についての説明があった）と看做して、ワードペアとしてリストに記載した例もある。例えば以下のようなペアがそれにあたる。

1475 thees two wordes -- *synne* and *God*⁵

2435 for alle the *clymbyng* and the *travaile* that he had into the mounte

1475 において、対照的ともいえるこれらの2語は、当然のことながらはっきりと対比され、ここでは “ synne ” を持つ者と “ God ” を持つ者を区別するために用いられている。これらは「反意語」としての関係を保ち、なおかつ形が整っている以上、ワードペアとしてリストに含めることとしたい。同様に、モーゼが山に登ったことについて記述された 2435 の例についても、それらの語句が使用された時点で、2語の間に関係があると想起させるに足るものはあったと言えるのではないだろうか。

4 “ come and teche thee ” (1277) については、2語の間の意味関係もあるが、この言い回しが現代英語にもあるような come and teach / come to teach と同じとも考えられるため、ここではワードペアとはしていない。

5 この例については、テキスト原文においてイタリック表記となっている。

4) 繰り返し用いられる表現に関して、その頻度を考慮するかどうか

繰り返し用いられる表現、特に頻出するペアについては、それらの語句が異なる形で用いられている場合にもその関連性に着目したくなるものではあるが、ここではそういった「考察範囲の拡張」を最小限に止めたいと考えている。以下、13例の“*wetyng* and *felyng*”のワードペアの用例、および関連する3例に関して考察する。⁶

- 133 alle *wetyng* and *felyng*
 137 alle *wetyng* and *felyng*
 730 alle *wetyng* and *felyng*⁷
 1520 alle *wetyng* and *felyng*
 1534 alle *wetyng* and *felyng*
 1535 the *wetyng* and the *felyng*
 1535-1536 *wetyng* and *felyng*
 1540 *wetyng* and *felyng*
 1543 this nakid *wetyng* and *felyng*
 1547-1548 this nakid *wetyng* and *felyng*
 1561 alle *wetyng* and *felyng*
 1564-1565 the *wetyng* and *felyng*
 1576 the *wetyng* and the *felyng*

 1539-1540 a nakid *wetyng* and a *felyng* of thin owne beyng
 1565-1566 a trewe *wetyng* and a *felyng* of his God
 1567 his *wetyng* and his *felyng*

本文に先立つ「目次」の記述(133と137の2例が用いられた箇所でもある)からまず読み取れるのは、この用例が多い43章および44章は正に以下のような「*wetyng*と*felyng*」について書かれたもので、従ってそれらの語句がワードペアであるかどうかに関わらず頻出するということである。

133-137

The thre and fourty chapitre. That alle *wetyng* and *felyng* of a mans owne being must nedelynges be lost, yif the perfeccion of this werk schal verrelly be felt in any soule in this liif.

The foure and fourty chapitre. How a soule schal dispose it on the owne partie for to distroie alle *wetyng* and *felyng* of the owne being.

6 ここに挙げた以外で当該の2語に関連した表現としては、“*wote* and *felith*”(1554-1555 および 1556)といった例がある。

7 43章と44章の本文・目次を除く箇所、本論文におけるワードペアの基準を満たすのはこの1例のみ。

1539-1540 と 1565-1566 の 2 例については、wetyng と felyng それぞれに冠詞（ここでは“a”）が付与されており（それは本論文では問題としないが）、また wetyng の方にのみ、冠詞との間に形容詞が入っている。これは、1543 および 1547-1548 の例、すなわち形容詞（nakid）の直後に wetyng and felyng と続いている 2 例と比較した場合、wetyng と felyng の間にある緊密さに違いがあるように思われる。また 1567 の例については、間に代名詞の所有格（his）が入っている。

機械的に過ぎるきらいもあるかもしれないが、ここではなるべく例外を作らず、1539-1540、1565-1566、1567 の 3 例についてはワードペアのリストから除外することとした。なおワードペアという用語は使わずに、これらの用例の全体を見渡した場合、wetyng と felyng が並べて用いられる際には、2 語が直接結び付けられたものが総数から言えば主流であり、逆に少数の例にのみ（一方に形容詞が付与されるなどの）活用がなされていることから、wetyng and felyng という表現は慣用的な性質が強いものであるとする解釈はできるかもしれない。

5. まとめ

以上のような定義、条件、基準などと照らし合わせて作成したワードペアのリストが末尾にある。用例数は329例であった。

ここまで見てきたように、ワードペアの範囲を定め、それを集計し、分類することは、決して単純な作業ではなく、テキストの内外にある様々な要因を考慮した上で初めて成り立つものである。ここで作成したリストは、あくまでワードペアの一面のみを切り取ったもので、決して十分なものとは言いがたい。しかしながらリストに見られる諸表現は、当該テキストの、あるいは作者の、ひいては中世英語の「ある面」を捉えたものと言えるのではないだろうか。

今回は明確な基準でワードペアをまとめることを優先したが、ここでは除外した or によるペアや、複数の語句や項目からなる組み合わせの表現とも併せて、広い意味での「ワードペア等の表現」といった枠組みの中で、どのように and によるワードペアが位置付けられるのか、さらなる考察と分析を行っていこうと考えている。

Bibliography

Texts

- Gallacher, Patrick J., ed. *The Cloud of Unknowing* Originally Published in *The Cloud of Unknowing* Kalamazoo, Michigan: Medieval Institute Publications, 1997. TEAMS Catalogue: Gallacher. TEAMS Middle English Texts. <<http://www.library.rochester.edu/camelot/teams/gallachr.htm>>.
- Hodgson, Phyllis. *The Cloud of Unknowing and the Book of Privy Counselling* EETS O.S. 218. London: Oxford UP, 1944, revised reprints, 1958, 1973, reprinted 1981.

References

- Gustafsson, Marita. *Binomial Expressions in Present-Day English: A Syntactic and Semantic Study*. Turku: Turun Yliopisto, 1975.
- Kikuchi, Kiyooki. "Aspects of Repetitive Word Pairs." *POETICA* 42、平成7年4月(1995年) pp.1-17. (Tokyo: Shubun International Co., Ltd.)
- Koskenniemi, Inna. *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto, 1968.
- . "On the use of repetitive word pairs and related Patterns in *The Book of Margery Kempe*." *Style and Text: Studies Presented to Nils Erik Enkvist*. Ed. Hakan Ringbom. Stockholm: Sprakforlaget Skriptor AB, 1975. 212-218.
- . "Semantic Assimilation in Middle English Binomials." *Studies in Classical and Modern Philology: Presented to Y. M. Biese on the Occasion of his Eightieth Birthday*, 4.1.1983. Eds. Iiro Kajanto, et al. Helsinki: Suomalainen Tiedeakatemia, 1983. 77-84.
- Leisi, Ernst. *Die tautologischen Wortpaare in Caxton's "Eneydos"*. New York: Hafner, 1947.
- Malkiel, Yakov. "Studies in Irreversible Binomials." *Lingua* 8 (1959) 113-160.
- Shibata, Shozo. "Notes on the Vocabulary of The *Book of Margery Kempe*." *Studies in English Grammar and Linguistics: A Miscellany in Honour of Takanobu Otsuka*. Eds. Kazuo Araki, et al., Tokyo: Kenkyusha, 1958. 209-220.
- Yamaguchi, Hideo. "A Study of the *Book of Margery Kempe*." 『神戸女学院大学論集』第18巻 第1号、1971年、pp.1-44.
- 谷明信 「初期中英語 the ' Wooing Group ' の Word Pairs の用法とその特徴」 『兵庫教育大学研究紀要』第23巻 第2分冊、2003年、pp.19-24.
- 青木繁博 「中世英語散文の文体とペアワード - Julian of Norwich と Margery Kempe」 『新潟青陵大学短期大学部研究報告』第37号、2007年、pp.59-72.

*The Cloud of Unknowing*におけるワードペアリスト (andのみ)

- ・アルファベット順 (まず最初の語について、次に二番目の語について) による。
- ・異綴や活用形については可能な限り一つにまとめる。その際の表記はテキストで最初に用いられた用例とする。
- ・本文で論じたように、ここでは名詞については冠詞のあるなしを問わない。

A
absent and present 2212-2213
almercyful and almyghty 1268
Almighty and Alle-witty 1395
answere and purvey 92
answere and sey 544-545
aungel and mans 321-322, 324

B
beestly and fieschly 2251-2252
beginne and ceese 1504
besied and travaylid 940
beter and holier 849
bigginers and profifers 1316-1317, 1321, 1336-1337
bigonnen and eendid 226, 554
blame and reprove 108, 1199
blyndely and lightly 2255
bodely and bestly 1624
bodely and fleschely 1771
bodily and goostly 221, 533, 563, 604, 1759
body and soule 749, 1459, 1579, 2044
the body and the spirit 1688
boldnes and presumpcion 1797
brethren and sistren 1109

C
canst and mayst 745
charitably and peteuously 920-921
chaste and parfite 1750
a cheitif and a coward 1226
childly and lewdely 2444
childly and pleyngly 1636
the clymyng and the travaile 2435
comprehendid and contened 2202
condicions and dedes 433
conformed and anowrnid 2164
contemplacion and love 857
conteneth and comprehendeth 2177-2178, 2210
corious and ymaginatyve 1772
corioustee and schewyng 2377
the cours and the maner 219
crien and whinen 1836
curtesly and meekly 1631

D
degré and compleccion 1579-1580
degré and maner 244
degrees and fourmes 225
the degrees and the partyes 59
desceyvid and infecte 1848
the desire and the steryng 1713
dispitous and reprovyng 654
the disposicion and the ordynaunce 1755

do and fele 1637

E
erre and faile 489
Everlastyng and Allovely 1394-1395

F
fayne and joiful 1878-1879
fed and counfortid 1750-1751
fede and encrees 444
fedyng and fortheryng 2238
feire and wonderful 475
felith and seeth 2332
felyng and knowyng 1613
felynges and wepynges 1747, 1751, 1762
fen and donghille 828
the fernes and the neernes 2348-2349
feynid and fals 2221
feynid and wrought 1961
First and formest 1147
fleschly and bodily 1592, 1597
flies and enemies 268-269
forme and degree 236
forme and maner 245
forsobbid and forsonken 1552
freelté and unknowyng 781
fynden and felyn 1466

G
getyn and holden 458
getyn and kyndelid 1605
getyng and keping 262
good and clene 624
good and holy 485, 628, 985-986
good and honeste 558, 969
good and ivel 147, 531, 1700, 1717
good and likyng 2484
good and profitable 943
the grace and the goodnes 1605-1606
gredy and hasty 1836
grete and horryble 1970
grete and wyde 1937
the grounde and the rote 683-684, 696-697
the grounding and the rotyng 643-644

H
had and lackyd 1734
hard and streyte 1132
hard and wonderful 286-287
harde and drie 1626
have and fele 1577
height and depnes 1382, 1394, 1400, 1410, 1415
hele and hyde 1664

herde and holpen	1401		
hetes and brennynges	1816		
hidous and wonderful	811-812		
holines and rightfulness	914-915		
How and whi	123		
I			
inner and utter	1890		
J			
the juelles and the relikis	2398		
K			
knoweth and felith	733, 734, 749-750		
knowyn and schewid	1655-1656		
knowyng and felyng	715, 1233		
the kyndnes and the worthines	459		
kyssyng and clippyng	1638		
L			
lappid and foulden	499		
laste and dwelle	2498		
lengthe and brede	1382, 1394, 1400, 1410, 1415, 2347-2348		
lightes and schinyng	1994		
liif and soule	406		
likyng and consent	2205		
lokyng and worching	1997		
lost and forgetyn	730		
lothe and hate	1529-1530		
the love and the levyng	1026		
loved and preysid	946		
M			
maad and wrought	1409-1410		
maker and gever	368-369		
makyng and declaryng	2445-2446		
meeke and lovyng	256		
meeke and semely	1900		
meeke and goostly	1623		
meeke and charité	707, 1113		
men and wommen	640-641, 741, 885, 908, 1616		
a merke and a mesure	1512		
mete and clothes	1036		
metes and drinkes	665		
the mirthe and the melody	608-609		
moche and longe	2386		
mynystred and preentid	2228		
N			
the nede and the werk	1376		
needful and speedful	776		
newe and fresche	1250		
night and day	1505-1506		
O			
ocupied and fillyd	1567		
onyd and congelid	1473-1474, 1532		
the ordynaunce and the disposicion	2384		
orrible and customable	1181		
P			
pees and rest	660, 2340		
pined and disesid	1104-1105		
pité and compassion	562		
pleinly and nakidly	1097		
poerly and pypyngly	1906		
power and cure	1196		
power and vertewe	8		
preier and penaunce	1798		
pride and curiousté	1594, 1957		
the profite and the needfulness	1755-1756		
proude and corious	539		
pureté and depnes	1648-1649		
Q			
quik and dede	604		
R			
rechyng and regnyng	2232		
red and spokyn	1589		
reden and heren	1806		
rediest and sovereynist	2511		
redyng and heryng	1319		
reson and wil	186, 2176, 2184, 2190		
rise and help	862, 932		
risyng and spryngyng	1695		
the rote and the grounde	1157		
the roundnes and the swarenes	2348		
S			
scolers and maystres	536		
see and fele	716, 1163-1164, 1165, 1170, 2415, 2442		
see and learne	1253		
seen and conceyvid	713		
seide and affermyd	817-818		
seing and thinkyng	481		
seintes and aungelles	280, 603, 722, 740, 795		
set and wretyn	1016		
seyng and felyng	791-792		
sittyngly and semely	1899-1900		
the smalnes and the gretnes	2348		
smyling and leighing	1861		
sobre and demure	1862		
sodenly and graciously	1877-1878		
sodenly and parfityly	387, 730		
softely and sweetly	1989		
sorow and contricion	561		
sorow and kumbryng	1459		
sorowed and weep	829		
sotely and parfityly	94-95, 698, 757, 1057		
sothfastnes and deepnes	1653		
soules and aungelles	331-332		
sounes and swetnes	146-147		
sovereynté and lordschip	1168		
speedful and needful	1088		
spekyng and preching	841		
state and degré	246		
state and forme	238		
the stathil and the pyne	2337		

the statute and the ordinance	784, 1196-1197, 1962	wrechidly and wantounly	2250
sterid and clepid	785	wrought and maad	2443
sterid and holpin	1144		
steryng and rising	689	Y	
steryng and thought	673	the ymage and the licnes	1397
stirid and reisid	1404-1405	ymaginacion and sensualité	2168, 2176-2177, 2185, 2191
stondeth and abideth	1130-1131		
stresse and streyne	1660		
swetnes and counfortes	1693, 1731-1732, 1743, 1754		
swink and swete	745		
<i>synne</i> and <i>God</i>	1475		
synners and innocentes	1178		
T			
taken and conceyvid	2152-2153		
temptacions and tribulacions	1758		
thankyng and preising	563		
think and deme	2417		
thoughtes and steringes	110		
The tre and the cuppe	2027		
troublid and travailid	557		
turned and clepid	74-75, 91, 1019		
the tyme and the maner	902-903		
U			
unordeynde and unsemely	1839		
unsemely and unordeinde	1865-1866		
the use and the worching	538		
used and provid	1584		
V			
vanitee and falsheed	1992		
verrely and parfitely	1073		
the vertewe and the condicions	2188		
W			
wel and trewly	1222, 2086		
a werines and an unlistines	655		
the werkes and the condicions	428-429		
wetyng and felyng	133, 137, 730, 1520, 1534, 1535, 1535- 1536, 1540, 1543, 1547-1548, 1561, 1564-1565, 1576		
wetyngly and wilfully	619		
wille and avisement	11, 781		
the wille and the desire	319		
wilne and desire	1288		
the windowes and the dore	268		
wone and worche	421, 1953		
wonne and lost	348-349		
woodnes and despite	1574		
worche and travayle	863		
wordes and contenaunces	1892, 1900-1901		
wordes and dedes	85, 919, 921		
the worthines and the condicion	2172		
the worthines and the gift	1575		
wote and felith	1554-1555, 1556		
a wrecche and a filthe	1232		
wrechid and cursid	254		